
背羽

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背羽

【Nコード】

N7126I

【作者名】

KMY

【あらすじ】

泉佐野菰人はある日、背中に羽の生えた一人の少女を目撃する。その少女は、泉佐野の学校の転校生、瀬庭美奈子であった。泉佐野は、瀬庭に「背中の羽のことを他の人に言ったら殺す」と言われ。瀬庭のためだけに軍まで出動！？あまり衝撃ではない展開、あまり衝撃ではない結末！

#1 背羽(前書き)

久しぶりにここに投稿してみました。今までに僕のここに書いた小説はことごとく完結していなかったもので、すっかり忘れられていたかもしれませんが。今回は詩を書く感覚で書いてみたので、いつもと作風がちよっと違います……けど、文体はちよっと作風を引きずっているところがあります。あと、濁点の間違いも健在です。ごめんなさい。生まれてきてすいません。

1 背羽

少年は、目撃した。

人通りの少ない、いつも通りの晴れた朝。いつも通りに少年は、学ランを着て、自転車に乗って、学校に向かっていた。

その途中にある泉盛寺公園せんじょうじを通りかかったとき、少年はその光景から目を逸らさずにはいられなかった。

フェンス越しに、見てしまったのである。

その公園の中央にある、大きな桜の木。

桜の花びらが、地面に舞い散っていた。

その花びらとともに、羽根が舞っていた。

下半身にはスカートを穿いていたが、上半身は裸であった。

その少女の背中に 大きな翼が生えていた。

その翼は、桜の木の下で、その木の半分はあるのではないかと思っうくらいの大きさであった。

長髪の少女は、ちらとフェンスのほうを一瞥する。

少年は慌てて、自転車のペダルを強く踏み、その場から全速力で離れた。

見てはいけないものを、見てしまったような気がした。

桜の花びらが、舞っていた。

少年の名前は、泉佐野萩人いずみさの はぎて。西田中学校の3年生。

しかしその日、少年は動揺していた。

見てはいけないものを見てしまったという恐怖感が、只管しかん少年にはあった。

中学校の始業式。

泉佐野にとっては、3回目の経験となる。

校長先生が舞台に立ってスピーチをするだけで、はい終了。
そのスピーチの内容も、短い。

一回目にこの始業式を経験した後は頭がキーンとなったものだが、
3回目ともなるとさすがに慣れた。

解散となった後、泉佐野は黙って体育館を出ようとする。

「ちよつと、泉佐野」

後ろから声があったので泉佐野は振り向く。

「龍造寺」

りゅうぞうじ龍造寺孟が立っていた。龍造寺は眼鏡をかけている。

「今日、朝学校に来てから全然僕と話していないよ？今まではたくさん話していたのに挨拶すらしてないよ？何があったの？」

泉佐野は、答えに詰まった。

《 …… まあ、あの事件のこと知っているか？ 》

《 …… それって、例の連続殺人事件？この辺で起きている 》

《 …… ああ、被害者は全員打撲だったさ 》

《 …… うわあ、怖い。何にぶつけたんだらうね 》

体育館を出た泉佐野は、空を見上げる。

横の龍造寺が、もう一度泉佐野に尋ねる。

「本当にどうしたの？」

「 …… 予感がする 」

泉佐野は、ぼやくように答えた。

「 えっ？ 」

「 …… 嫌な予感がするんだ 」

「 それって具体的にどういう？ 」

「 分からない 」

弱い声であった。

「 どうしてそんな予感がするんだ？ 」

龍造寺が尋ねると、泉佐野は首を横に振る。

「今朝……、見てしまったんだ」

「何を？」

「……っ」

泉佐野は、背中がぞくつとした。

これを言っただけはいけないような気がした。

「前までは気が強いのにどうしたんだよ急に。春休みに何かあったのか？」

いや、違う。

今朝。

今朝、泉盛寺の公園で見てしまった。

見てはいけないものを見てしまった。

「背中の羽……」

「羽？」

「いや……、何でもない」

泉佐野はそう言っただけで、走り逃げるように体育館の出口から何メートルか離れた校舎の裏口に入る。

「ちょっと、本当にどうしたんだよ……」

龍造寺も、泉佐野の後を追う。

教室の中では、再会を喜ぶ人々が話し合っていた。

しかし、二人だけは静かであった。

「背中の羽がどうしたの？」

隣の席の龍造寺が尋ねてくる。

「黙ってよ」

泉佐野はそれだけ言っただけで、うつむく。

龍造寺は、これ以上詮索してはいけないような気がした。

「分かった」

それだけ答え、泉佐野とは反対側を向く。

泉佐野は、机の木目を眺めていた。

「あれは……夢だよな」

ぼつりと言っ。

「なあ、龍造寺……」

龍造寺がこっちを向いてきたので、泉佐野は続ける。

「僕、今朝、この学校に来る途中に、泉盛寺公園でさ……」

と同時に、教室のドアが開く。

生徒たちは雑談をやめ、教室の前を見る。

1年生のときからずっと2組を担当してきた桐生先生きじょう、そしてその後ろには一人の少女が控えていた。

その少女の横顔を見て、泉佐野は恐怖した。

今朝見てしまった、あの少女を連想してしまった。

体型も、あの少女を連想させるものであった。

背は女子としては高い。泉佐野と同じくらいの身長である。

スカートの色 今朝見た色と同じだ。尤も他の女子も同じ色だ

けど。

「転校生です」

女の教師、桐生先生はにっこりとそう言って、黒板に字を書く。

”瀬庭 美奈子”

くるりと生徒たちのほうを向いた桐生先生は、明るい声で続ける。

「この転校生は、瀬庭美奈子せはなと言います。みなさん仲良くしてくださいねー。それじゃ、自己紹介して」

「はい」

「はい」

瀬庭と呼ばれた少女はそう返事をして、桐生先生の横に立って言う。

「瀬庭美奈子と言います。これから1年間だけですが、よろしくお願ひします」

明るい声で、そう言ってぺこりと頭を下げる。

ぱちぱち。

生徒達の拍手の音。

生徒達の拍手の音。

「それじゃ、これから席替えをしますがその前に瀬庭さんは一番後

ろに空いている席があるからそこに座ってください」

桐生先生が言うと、瀬庭は「はい」と答えて、泉佐野のほうへ向かってくる。

背中まで伸ばす長髪。目もかわいかった。

その顔を見て、泉佐野はどきつとした。

瀬庭は、その泉佐野の顔を見て、にっこりと微笑みかける。

「あ…よろしく」

泉佐野が、誰にも聞こえないくらい小さな声で言った。

「ふふっ」

瀬庭は、微笑する。かわいい顔であった。

そして瀬庭は、座っている泉佐野とすれ違った。

泉佐野の耳にふと、瀬庭の声が入った。

「……言ったら、殺すからね」

泉佐野は、どきつとする。

その心臓の鼓動は、明らかにさっきとは別のものであった。

泉佐野は、思わず後ろを見る。瀬庭の背中。

翼は生えていなかったが、それはまさに 今朝見たあの人。

泉佐野はぼっかりと口を開けて、その背中を眺めていた。

#2 落下

泉佐野は、呆然とした顔で屋上に立っていた。

平らで何も無い屋上には、泉佐野以外誰もいない。

泉佐野は、柵の向こうの運動場を眺めていた。

「何で…こんなことになったんだよ」

運動場では、何人かの生徒がサッカーをしている。昼休みもそろそろ終わりというに、サッカーは今すぐには終わりそうもない。

泉佐野は腕時計を見てため息をつく、階段のほうへ戻る。

翼。

昨日転校してきた瀬庭は……、あの翼の持ち主なんだ。

あの、大きな翼の持ち主なんだ。

今朝は、挨拶すらしなかった。瀬庭とはろくに話していない。謎で出来ている女の子としか思えない。今朝は別のコースを通ったからあの公園の前は通っていない。瀬庭は昨日早速他の女子とうまくやっている様子だったが、それでも。

『言ったら、殺すからね』

そのセリフを思い出すだけでも、泉佐野は身震いがした。

「泉佐野」

先生の太い声。

「は、はいっ！」

泉佐野はびくっとして、思わず立ち上がる。数学の先生であった。そうか、今は数学の授業なのか…。

「泉佐野、この問題に答えなさい」

先生の声。泉佐野は、黒板を見る。

”5の平方根は？”

泉佐野は、黙って黒板のほうへ歩いていく。そうして、白いチョークを手に取り、問題文の下に書く。

” ±5 ”

クラスからどつと笑い声上がる。

「授業をちゃんと聞いていない証拠だぞ」

数学の先生の言葉。

泉佐野は、うつむく。

何だよこれ。

僕は…。

怖いんだよ…。

昨日の席替えで、泉佐野は瀬庭と3つか4つ離れた席になった。

それでも怖かった。できれば教室の斜め端と斜め端同士の関係であればと願っていた。しかしそれは叶わなかった。

泉佐野はぎゅうつと唇を噛み、黙って自分の席に戻る。

《 泉佐野、3年生になってからちよつと暗くない？ 》

《 きつとそのうちに直るよ 》

《 あはは、そうだね、気にすることないよね 》

女子の噂話が耳に入ったが、泉佐野は黙って席に座った。

ふと、後ろを見る。瀬庭がいる。

こちらを睨んでいる。

鋭い目で睨んでいる。

怖い。

まさか、あの翼で上から落とされるんじゃない…。

道を歩いていたら突然後ろから体を掴まれて、そのまま上へ持つて行かれて手を離れたら…。

……あれ？

最近このあたりで連続殺人事件が起こっていたよな？確か。

そして、被害者は全員打撲死…。

まさか…。

泉佐野の心臓がどくんどくと鳴る。

まさか……。

まさか……………！

泉佐野は、恐る恐る後ろを見る。長髪の瀬庭は、相変わらずこちらを睨んでいる。

勇気だ。

こんなときにこそ、勇気だ。

泉佐野は、ぐっと両手を握り締める。

「き、来たな」

その日の放課後、泉佐野は屋上にいた。階段室から屋上に出てきた瀬庭を指差しながら、泉佐野は言った。

「用って何なの？」

瀬庭はしれっとした顔で、泉佐野に尋ねる。

「部活のトライアウト、今日からなのよ。早くしてくれない？」

瀬庭がそう言うって自分の制服の襟をいじる。泉佐野も陸上部にもかかわらず着替えていず、制服であった。

「瀬庭……、お前、ひ、人を殺しただろ？」

勇気だ。

勇気。

ぐっところえる。これは勇気だ。

もし僕の予想が当たっていたら、僕が、瀬庭を止めてやる。

そして、これからの死を未然に防ぐのだ……。

泉佐野は、自分がなぜこれをやっているのか十分理解できていた。しかし、それはやっぱり違うこれが本当の理由なのだと、無理矢理自分自身に言い聞かせていた。

そうだ。瀬庭は、たくさんの人を殺しているんだ。僕が止めなければ。

「何のこと？」

「ほ、ほら、最近このあたりで打撲事件があるんだろ？その犯人、せ、瀬庭だろ？その翼で持ち上げてさ、落として……。」

「確かに私は翼は持っているけど、やったのは私ではない」

瀬庭はそう言っ、ゆっくりと泉佐野のほうへ歩み寄る。

「用はもう終わり？」

「……終わりだよ」

泉佐野はそう答えた。

当てが外れた。泉佐野はため息をつくと同時に、一歩一歩こちらへ歩いてくる瀬庭を見て違和感を覚えた。

「今からトライアウトじゃなかった？」

泉佐野がそう尋ねると、瀬庭はにっこりと言う。

「気が変わった」

そう言っ、制服の上着を脱いで地面に置くと泉佐野の後ろに回っ、泉佐野の体を後ろからぎゅうと抱く。泉佐野はどきっとする。

「こうでもしないと、落ちちゃっからね」

「……えっ？」

泉佐野が声を上げると同時に、瀬庭の背中のカッターシャツがぱらりと破れ、そこから翼が出てくる。

大きな翼は瀬庭の背中から、泉佐野の体をも包む。

真っ白な羽根がいくつか散らばる。

「こ…これは？」

泉佐野が尋ねると、瀬庭の声が後ろからする。

「私の翼」

「へ？」

泉佐野がそう言っと同時に、翼が振られ、風が起こる。足がふわっと地面から離れる。

屋上が、段々小さくなっていく。

瀬庭の背中が、はためいていた。

泉佐野は、呆然とした顔で下を眺めた。

下の運動場では、誰もが知らぬ顔で野球部と陸上部とテニス部に打ち込んでいる。

体中がふわふわと浮き上がる感覚はしなかったが、それでも後ろ

から異性に強く抱かれている感覚はした。

でも、その感覚は、未知の視線という感覚に打ち消された。

これは、今まで見たこともない景色。

自分の町が、学校が、病院が、自宅のあるマンションが、図書館が、スーパーが、何もかも空から見えた。

道路を豆粒みたいな車が走っている。

今まで何回も見てきたはずなのに、初めて見る景色であるような不思議な感覚がした。

「わあ……」

泉佐野は、思わず声を上げる。前から顔に当たってくる風が気持ちいい。

「このこと、絶対に誰にも言わないでね」

上から瀬庭の声。

「分かった」

泉佐野はそう答え、下に広がる、駅前、ビルの屋上が並んでいる景色に見とれていた。

「もっと近くから見たい？」

瀬庭の声。

「できるの？」

泉佐野がそう尋ねると、瀬庭は答える。

「ええ」

その声の色は、明らかにさっきと違っていた。

隆司はそれを感じ取った。

「瀬庭」

そう言いかけると同時に、瀬庭が泉佐野を抱く力が弱くなってきているのに気付いた。

「お、おい、瀬庭、まさか……」

泉佐野は、冷や汗がした。

「その、まさかよ」

瀬庭はそう言い、ふわっと一気に腕を広げる。

泉佐野の体は、真っ逆さまに落下する。

今度は下からの風が、気持ちいいと言っている場合ではなかった。

「あなたは、信頼できない」

上から声。

その声は、もう霞んでいた。

ビルとビルの間隙間を、泉佐野は落ちていた。

泉佐野は、冷や汗をたくさんかいているのを感じた。

目の前には、混雑していず、車の通りの速い道があった

・
・
・

#2 落下（後書き）

しばらく来ていないうちにここまで大胆にリニューアルしたんですね……。小説家になろう」。うん。小説IDも、いつの間にか「i」になっている……。前来たときは「c」だったのに。

こんなすばらしいサイトに、僕の駄作を載せてしまって、ごめんなさい！本当にごめんなさい！

#3 暗殺

……ん？

ここは？

泉佐野は、ばちりと目を開けた。

辺りは薄暗い。むくりと背中を起こした泉佐野は、周りを見回す。薄暗い。灰色一色なだけで、何も無い。いや、あさつてのほうから光が漏れている。

それはどうやら、窓のようであった。

はっと目を丸くして、泉佐野は立ち上がる。そこは窓。壁の半分の半分くらいの大きさの窓が置かれている。窓は高い。しかも、鉄製の檻までついている。

泉佐野は後ろを向く。そこには、鉄製のドア。

泉佐野は一瞬にして、自分が閉じ込められている感覚を覚えた。と、その時、ドアが開く。

ドアが開いて、一人の、迷彩服のこつい体をした大人が入ってくる。

腹が大きいのは少なくとも脂肪ではなく筋肉のような感覚がした。顔も大きいこそ皮膚はびんと張っていて、泉佐野はその体を見て恐怖した。

「あの、僕はこれから死ぬのでしょうか？」

その声は震えていた。途端に、その男の視線がぎろりと泉佐野を睨む。泉佐野は、聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がした。

戦慄から後ろに退った泉佐野を見下ろして、男はドアを閉め、ドアの前の2段程度の階段を下りると、言う。

「案ずることはありません。それよりあなたには、我々の計画に協力して欲しいのです」

「はい？」

泉佐野は、目を点にした。

「いきなり脅かせてしまつてすみません」

男はそう言い、迷彩のズボンのポケットに手を突っ込んで続ける。

「あ、あの、あなたは……？」

泉佐野が恐る恐る聞くと、男は答える。

「私は、西田市の自衛隊の一員であり、臨時に組成された特別活動隊のリーダーをやっている押谷成三おしやしげさうと申します」

「は、はあ……」

「唐突で申し訳ございませんが、あなたは瀬庭美奈子という人物を知っていますね？」

「はい、僕の同級生で……」

泉佐野がそう言うと、男の目は吊りあがる。

「同じクラスですか？」

「はい」

「本当ですか？」

「はい」

「嘘を言えば、大変なことになりますよ？」

「本当に同じクラスです。というかこの前転校してきたんです」

「本当ですか？」

「はい」

何度も念を押しした押谷は、さらに続ける。

「これから言うことは誰にも言わないでください。あなたに我々の計画に協力していただきたいので、そのことを覚えていただきたい」

「はあ」

「これから私が言うことをほかの誰にも言わないことを誓いますか？」

「はい」

「本当にですか？」

「はい」

「本当ですか？」

「はい」

「嘘を言えば、大変なことになりますよ？」

「はい」

そう念を押した後で、押谷は続ける。

「殺そうと思っっています」

泉佐野は、目を点にする。

「……はい？もう一度言っただけませんか？」

「我々は、瀬庭美奈子を暗殺するために組織された特別隊なのです」

「……み、妙なご趣味ですね、な、何でまた……」

泉佐野がそう言つと、押谷はポケットに突っ込んだ手を出す。その手には、一枚の紙が握られていた。

「瀬庭美奈子は、背中に翼が生えているという特殊な体質を利用して、次々と人を殺しているのです。あなたみたいな方法でね……」

「……で、ぼ、僕はどうやって助けたのですか？」

「本当に危ないところでした。あなたは、我々のトラックの荷台へ落ちました。荷台の上に何人かの兵士がいたことが、不幸中の幸いでした」

「……」

「それで、瀬庭美奈子はその特殊体質上、警察もなかなか証拠を掴めない。そこで我々が極秘に動くことになったのです。我々が手を下して、瀬庭美奈子を暗殺します。そのために、あなたにも協力していただきたいのです」

「は、はい……」

立っている泉佐野は、足が震えていた。

「ではまず、あなたのお名前を」

「は、はい、ぼ、僕は泉佐野萩人と、いいます」

その次の月曜日の朝、泉佐野は早めに学校に来て、自分の席に座っていた。

周りには誰もいない。教室の時計を見る。5時半。

母にも不思議がられた。なので泉佐野は、学校で特別に早く行かなければいけない用事が出来たと言ってごまかした。

「はあ……」

泉佐野は自分の席から立ち上がり、窓辺へ行く。案の定、校庭には誰もいない。

途端に泉佐野は、教室に一人だけにいることに恐怖を覚えた。

だめだ。

この計画のことは……。

泉佐野は、この計画にどこか気に食わないところを感じていた。

確かに、警察だとヘリコプターを使っても瀬庭は射落とせないかもしれない。軍に任せないと、最新の銃やヘリコプターを駆使して瀬庭を殺すこともできないだろうに。

確かに、瀬庭が殺した人の数は計り知れない。

でも。

泉佐野は、ぐっと両手を握り締める。

泉佐野は押谷から、瀬庭が翼を広げたときに直ちに連絡するよう言われていた。空の上で、一般市民に危害を加えることなく射落とそうとする魂胆なのだ。

でも。

そうやって、瀬庭を殺してもいいのだろうか？

瀬庭には瀬庭の言い分があるのではないのだろうか？

殺す前に、何かするべきことがあるのではないのだろうか？

瀬庭の名誉を傷つけることになっても、マスコミに瀬庭の情報を流してニュースをやらすという方法もあるのではないのだろうか？

泉佐野は、空を見上げる。

平和なはずのその空には、いつも通り、平穏な顔をした白い雲と、平穏な顔をした青い空が広がっていた。

4 選択

瀬庭。

瀬庭。

瀬庭。

瀬庭。

瀬庭……。

泉佐野は、ぐっとポケットの中の携帯電話を握り締めていた。

目の前には、友達と仲よさそうに話している瀬庭。

伝えないと。

瀬庭を殺そうとしている連中がいるってことを。

それ以前に押谷の話からは信憑性が半分しかないというか、今で

も泉佐野は半信半疑であった。

それでも。

「おい、瀬庭」

泉佐野が声をかけると、瀬庭は振り向く。

「何？」

その顔は、かわいらしかった。

すごくかわいかった。

笑顔。

何でこんなときに限って笑顔なんだよ。

ちくしょう。

「どうしたの？」

瀬庭と話していた友達の女の子が、泉佐野に尋ねる。

「いや……」

二人がこつちを見ているのを見て、泉佐野は返事に詰まる。

「何でもない」

それだけ言って泉佐野は、走って行ってしまった。

「変な人」

友達が言ったので、瀬庭も頷く。

くぞおおおおおおおっ！！

男子トイレの一番奥の個室にこもって、泉佐野はおもいつきり床を殴る。

言えよ。

言っとけよ。

瀬庭を殺そうとしている連中がいるってことを。

翼を一度広げたが最後、撃ち落とされるってことを。

でも、こんなことを言ってしまったら、僕も……。

「殺します」

昨日の押谷の言葉が、頭から離れない。

押谷が昨日持っていたあの紙は、やっぱり瀬庭のプロフィールだった。ごっそり覗いて見たら、瀬庭の誕生日、住所、何もかも書かれていた。

あとは実行の段階ですって何じゃそりゃ。

もう兵器まで準備しているのかよ。対空ミサイル？それはちよつと大きすぎるが、とりあえず相当の兵器は準備しているんだろうか。言わないと。

今日は絶対に、瀬庭に言わないと。

泉佐野はそう自分に言い聞かせて、立ち上がる。待てよ。

瀬庭は今までに、本当にたくさんの人を殺してきたんだろ？

背中に生える翼で、たくさんの人を殺してきたんだろ？

なら、死んでも当然じゃないのか？

「……………っ」

泉佐野は、目を強くつぶる。

「おお、瀬庭速いな、瀬庭」

隣に座っている龍造寺が叫ぶ。それを聞いて、泉佐野ははあつと

ため息をつく。

男子は皆、グラウンドにあるトラックのスタート地点の横に座って、女子が走っているのを見ていた。

しかし、何だ。

女子の中でも特にとび抜けたのが瀬庭である。

そりゃそうだよ、翼が生えてて体中がふわっと軽そうだもん、と

泉佐野は言いかけたが、やめておいた。

そういえば、瀬庭の翼って普段はどこにあるのかな。

背中の中？

あんなに大きいものを服の中に入れられるわけないだろ？第一着替えるときに他の女子に見られるしなあ…。

トラックの白いラインの石灰を踏んで4周目に入った瀬庭は、泉佐野をじつと見ていた。

ふと顔を上げた泉佐野は、不意に瀬庭と目が合つてどきつとずる。やっぱり、言わないと。

だって、この世界に、死んで当然な人は一人もいないんだから。

他の女子たちは、半分以上が3周目に入ったばかりのようである。

「どうした？瀬庭のことが好きなのか？」

隣から入ってくる龍造寺の声に、泉佐野はどきつとずる。

「そんなわけないだろうか！変なこと言わないでよ」

「あはは」

龍造寺は笑いながら立ち上がる。

「もうすぐ男子の番だよ」

「分かった」

泉佐野もそう答えて、立ち上がる。

笑顔だった。

「瀬庭」

次に泉佐野がその名前を呼んだのは、昼休みであった。

屋上。二人。また前回のパターンである。

「何で、生きているの」

屋上の端に立って振り向いた瀬庭は、哀愁の目をしていて。黒い長髪が、風に揺れている。

顔、かわいいなあ……。

泉佐野がそう思うや否や、瀬庭の強い声が聞こえる。

「どうして？ 答えて！」

「……ん、あ、いや、」

「早く答えないと……、もう一度落とすわよ」

「お、おい、瀬庭！」

泉佐野は、勢いよく声を張り上げる。

「あ、あのさ、瀬庭を……」

その時、ぶわっと風が吹き上がる。次の瞬間、瀬庭の背中にはあの大きな翼が広がっていた。

あの、真つ白な翼が……。

泉佐野は、目を丸くした。

「お、おい、瀬庭っ！」

そう大声で言うもむなしく、瀬庭は泉佐野の体を思いつきり強く抱きしめる。

なんか、ドキドキする。

でも……。

心臓の鼓動を抑えながら泉佐野は、瀬庭が自分を抱く腕に手を当てて、大きな声で言う。

「翼を、広げるなっ！！」

「なぜ？」

「あ、あのさっ、」
殺します。押谷の声が聞こえたような気がしたが、泉佐野は首をぶんぶん振る。

ほぼ同時に、泉佐野の足が浮き上がる。

「ああっ、駄目だああああああああああああああ！！」
浮かぶ。

高く。高く。高く。高く。高くへ。

「瀬庭を、殺そうとしている連中が、いるんだあああつ!!」
ありつたけの声をこめて、泉佐野は叫んだ。

ドン。

大きな銃の音がする。

上を見ると、いつの間にか真上へヘリコプターがあった。

深緑色の、「西田自衛隊」と白く書かれたヘリコプターが1つ…

…。

「えっ?」

「瀬庭、逃げる!とにかく飛べ!!」

泉佐野がそう言った次の瞬間、再び次の銃声が出た。

その弾は、瀬庭の翼の端を掠る。

ふわっと、たくさんの羽根が舞い上がる。

瀬庭の長髪が、揺れている。

「……………」

瀬庭は少しの間呆然としていたが、次の銃声がすると同時に、右へ飛んだ。

おもいつきり速く。

できる限り速く。

前から来る風が、強い。

景色はほとんど動いていなかったが、強い風で泉佐野は、速く飛んでいることを感じた。

「どっして……」

と、その時、他の方向から別のヘリコプターの音がする。最低でも5つはあるだろう。次々と銃声が出てくる。

「とにかく下へ降りろ!」

泉佐野がそう言うと、瀬庭は言われるがままに、下へ向かって飛ぶ。

《こちらF-32。作戦は失敗。総員基地へ戻られたし》

そう無線に言い終えた押谷は、ぐそつと声を張り上げて、どんとそこを叩く。

「泉佐野……、裏切りましたね」

青空が、広がっていた。

朝とはまた別の色をして　　・　　・　　。

5 分離

ビルとビルの間を飛び降り、ビルを仕切る小さな細い塀の上に足を乗せた泉佐野は、後ろの瀬庭を向く。

「ねえ、どういうこと?」

瀬庭は、相変わらず冷静な顔をしている。しかし何かがおかしいことを感じ取ったらしく、声の色は違っていた。

「瀬庭、瀬庭の命が狙われているんだよ」

「えっ?」

瀬庭は驚いた顔をしている。口をあんどり開けている。

「どうして?」

それでも”敵”からこれを聞くということに多少の抵抗を感じているようで、顔からは少々警戒の相が読み取れた。

「どうしてなの?」

「瀬庭がその翼で、たくさんの人を殺しているからだ」

泉佐野がそう言うと、瀬庭は黙り込んでしまう。

「ねえ」

今度は泉佐野が尋ねる。

「何で瀬庭は人を殺すの?」

その問いに、瀬庭は高い高いビルとビルにはさまれて細い細い青い空を見上げる。背中の翼は閉じているようで、見えない。

「……私だけの力だから」

「えっ?」

「この世の中で翼を持っているのは私だけ。他にもいるかもしれないけど、今はとりあえず私だけ。私の周りには誰もいない。私だけが持っている力なの……。だから、この力を、なにかいいことに使おうと思っていた。他の人にはできない、なにかいいこと……」

「まさかだけど、瀬庭が今まで殺してきた人って……」

「ええ、そうよ」

瀬庭はため息をつく。

「強盗や盗みをやつて、他の人と同じように能天気過ぎている人たちよ……、私が今まで殺してきたのは」

「……………」

今度は泉佐野が言葉に詰まる。

「天気の良い日に空を飛んで、下を見下ろすの。すると、たまにコンビニから刃物を持って黒いかばんを持っている人が出てきて、バイクに乗るの。その人の後を追いかけて、その人が誰も見ていないところまで逃げたら降りるの。それで、その人の背中を掴んで落とす。それが私の仕事」

背中の中の長髪が、隙間風に揺れていた。

「……………盗みと殺すと、どっちが重いんだよ」

「えっ？」

「どっちが罪として重いか聞いているんだよ！」

泉佐野が叫ぶが、瀬庭は黙って首を横に振る。

「悪いことは分かっている。でも、生きるために悪を選ぶ人がいれば、私のように悪を悪を持って罰する人もいる。そして、それがいつしか私の生きがいになっていた」

「……………」

泉佐野は、返す言葉も見つからなかった。

「け、けど、瀬庭はそのせいで今自衛隊から命を狙われていて……………」

「自分の使命のために死ねるなら、本望」

瀬庭はそう言うと、背中から翼を生やす。

広げる。

白い。白かった。

今までで最高に白い翼であった。

白い。白い。でも……………」

泉佐野は、ぱつと瀬庭の腕をつかむ。

「こんなくだらない死に方でいいの？」

「くだらなくなんか、ない」

しかし、どこの番組をあたってても、そのような話題は扱っていなかった。

「また、取材中か……」

番組の最後のほうでやるのかな、と思ってテレビを消した泉佐野は、後ろを振り向く。

「話は、最後まで聞く！」

母が立っていた。大声で怒鳴られた。

しかし、泉佐野には、そんな声などどうでもよかった。

瀬庭が、瀬庭が、気になって、気になって、仕方がなかった。

次の日。学校。

2時間目が終わった後、先生に職員室に呼び出されて、ものすくなく叱られた。当たり前だ。

昨日、昼休みの途中に学校を抜け出したんだから。

しかし、泉佐野にとっては、そんなことはどうでもよかった。当たり前だ。

瀬庭が、瀬庭が、瀬庭が……。

今も屋上にいるような気がする。

今でも、屋上にいるような気がする。

凜とした瞳。そして、長髪。

そんな瀬庭が、かわいく見えてくる。

そのかわい顔の中に、残酷さが込められている。

でも、何だろう、この感じは……。

「こら、聞いているのか！」

先生の怒鳴り声。それはさすがに耳に入ったらしく、泉佐野は目を見開き、先生を見る。

その日の昼休み、泉佐野は屋上へと続く階段を上っていた。

なんとなく、なんとなく瀬庭がいるような気がした。

もしいなくても、会えるような気がした。

6 決意

そんなの、分かっている。
分かっているんだよ。

泉佐野は、屋上に座っていた。

目の前にある瀬庭の体を、どうすればいいか分からなかった。

保健室に持つていけば、間違いなく殺されるだろう。それ以前に瀬庭が翼を開きっぱなしである。それも、穴の開いた翼が . . .

と、上からヘリコプターの音がする。

はっと上を見上げた泉佐野は、ヘリコプターの窓から一つの拳銃がこつちへ向けられているのに気付いた。

それが瀬庭へのものであったのか泉佐野へのものであったのかは分からないけれど、泉佐野は無意識に、とっさに瀬庭の体を抱え、階段室へと駆けていた。

ドン。

銃声があったが、少なくとも泉佐野には当たらなかった。

泉佐野は只管ひたすら、階段室へ、室内へ、駆け込んだ。

銃声を聞きつけた数人の学生たちが、そこへ押しかけた。屋上のドアの前に、彼らは集まっている。

それを見越して、泉佐野はそそくさに学生たちの目から瀬庭をかわずように走り、どこかのトイレの中に駆け込む。

個室の鍵を閉める。

「はあ、はあ、はあ、……」

洋式の便器の前で仰向けになっている瀬庭を見下ろして、泉佐野は便器の横に立って何度も何度もため息をつく。

「つたく、瀬庭の奴、なぜ……」

5時間目のチャイムが鳴ったが、泉佐野は教室に戻る気にもなれ

なかった。ただ、瀬庭の近くにいななければいけないような気がした。泉佐野はしゃがんで、そっと瀬庭の折れた翼に触る。そうだよな。確かにそうだよな。

瀬庭は、誰にも持っていない翼を持っている。誰にも持っていない自分だけのものを、誰にもできないことに使うのは、誰もが考えること。

でも、人々はそれを躊躇する。おろが、自分だけのものを見つけていない人すらいる。

それでも瀬庭は、一つも躊躇せずに自分の使命を果たした。

瀬庭……、強いんだな。

強いんだな。

ばかり。

瀬庭の目が開く。その目は真つ先に、泉佐野の顔を捉えた。男とは思えない、かわいらしい、やさしげな顔である。

「っ」

瀬庭の様子を見て、泉佐野は翼から手を離す。むくりと起き上がった瀬庭は、辺りを一通り見回した後、横の泉佐野を睨む。

「どうして助けたの」

「瀬庭」

泉佐野は、ため息をつく。

「瀬庭が可哀想だから」

「どうして私が可哀想なの？」

「こんなに傷ついているから」

泉佐野の、男を思わせないおとなしいしゃべりぶりに、瀬庭はため息をつく。

「私を可哀想だと思っている暇があったら、私が殺した人を可哀想だと思いなさい」

「それはできない」

「えっ？」

瀬庭は、びくんと目を見開く。辺りは、しーんとなる。

「瀬庭は、瀬庭にしか持っていない翼で、瀬庭にしかできないことをやっている。そのどこがいけないんだ？」

「えっ？」

瀬庭は驚いた顔をしている。かく言う泉佐野自身も、驚いていた。さっきまではまったく正反対のことを考えていたはずなのに、今は

……。

瀬庭は、笑いをこらえている様子であった。

「嘘が下手ね」

そう言っつて瀬庭は、自分の翼をさする。狭い個室。

「便器に座っつてよ」

泉佐野が言っつと、瀬庭は笑いを止める。

「どうして、そこまで言っつてくれるの？そこまでやさしくしてくれるの？気持ち悪い」

そう言っつて立ち上がった瀬庭は、個室の鍵を開ける。

「どこ行くの？」

泉佐野が尋ねるが、瀬庭は黙っつて個室を出る。目の前に見慣れなもの　男子トイレの小便器があっつたが、瀬庭は構わっつず横の窓のほうへ行く。

窓を開ける。

「ち、ちよっつと、瀬庭、その翼じゃ……」

「分かつつてる」

瀬庭は、頭から腰ほどの高さはあるその窓の下の棧に、手をかける。

「私、小さいときから、家族からも周りの人からもからかわれていたの。この翼のせいで」

「えっ？」

そう返す泉佐野を、瀬庭は振り向く。笑顔だっつた。

「殺す理由が私にしかできない殺し方だから、なんて嘘。本当はね、

みんないなくなっちゃえばいいって思っていた」

そう言い、窓の手前の、細い台のようになっているところに片膝をかける。

「ち、ちよっと、瀬庭！」

泉佐野が、そこへ駆けていく。瀬庭の腕をつかむ。

「離して」

瀬庭が言うが、泉佐野は離さない。

「みんないなくなっちゃえばいいんなら、何で物を盗んだ人だけ殺すの？」

「……っ」

「瀬庭は、本当は我慢していたんでしょ」

「何を？」

瀬庭がそう返すや否や、泉佐野はぎゅっと瀬庭の背中を抱く。

瀬庭が泉佐野を空へ連れて行ってくれたときは反対に……。

「温もりを」

泉佐野がそう言うと、瀬庭は目を大きく見開いた後、閉じて、ぼろりと涙を流す。泉佐野は続ける。

「瀬庭は、本当は温もりが欲しかったんだ！今までみんなに冷たくされて、死んでしまいそうになって、それでも死にたくないから、悪い人を殺して自分の心を満たしているだけ……なんだよね」

瀬庭は、窓の手前から膝を下ろす。泉佐野は、さらに瀬庭をぎゅっと強く抱く。

「瀬庭をからかう人がいたら、僕が瀬庭を全力で抱く！温もりなら、僕がいくらでもあげる！ずっと瀬庭のそばにいる！ずっと抱いてあげる！暖かくしてあげる！だから、みんなに冷たくされただけでそんなに落ち込まないで、瀬庭」

瀬庭は、泣いていた。

ひつく、ひつく、としゃっくりをしながら、頬を真っ赤にして泣いていた。

#6 決意（後書き）

この後、感動小説にありかちな描写しかありません。ベタな感動描写しかありません。全くインパクトのない感動のクライマックスです。もう今までにたくさんその手のものを読んでもううんざりという方は、ここで読むのをやめられることをお勧めします。

#7 勇気

押谷さん。

何度もその番号にかけるが、応答がない。

苛立ちを感じながら携帯電話を閉じた泉佐野は、学校の屋上に立っている。

後ろには、瀬庭も立っている。

あの銃創のたくさん残っている翼を広げて。

「返事、ないの？」

「うん」

泉佐野は、うなずく。

「多分、逆探知していると思う」

泉佐野が言うと、瀬庭もごくりとつばを呑んで頷く。

「もし、謝って赦されるとしたら……、どうする？瀬庭」

振り返る泉佐野が尋ねると、瀬庭はしばらくうつむいて黙っていた。

そして、にこりと笑顔で泉佐野を見る。

《瀬庭美奈子と言います。これから1年間だけですが、よろしくお願ひします》

二人が二回目会ったあの時。

瀬庭は、泉佐野に微笑んだ。殺意を込めて。

でも今は、そんな殺意などなかったように思えた。

ただ、純粋な笑顔　　・・。

泉佐野は、空を見上げていた。

押谷さんが来たら、謝る。全力で謝る。

僕が抱いてあげるから、瀬庭はもう悪いことはしません　　・・。
そう言っつて、土下座してもいいと思っつていた。

ドン。

ヘリコプターの音とともに、その無残な音は聞こえてきた。2人の手前に当たったその弾は、屋上の床をへこませる。

「押谷さああああああああああん!!!」

泉佐野は、全力で手を振り上げる。

瀬庭も、全力で手を振り上げる。

ヘリコプターは、5つ。

その全てから、銃がこちらへ向けられている。

ドン。ドン。ドン。

2人は全力で走って、なんとかかわす。

「押谷さん！話を聞いてくれ!!」

泉佐野が叫ぶが、瀬庭はそんな泉佐野の腕を強く掴む。

「飛びたい」

「えっ？」

泉佐野が思わずそちらを見ると、瀬庭は続ける。

「最後でいいから……、飛びたい」

一切のしがらみのないその瀬庭の笑顔を見て、泉佐野も笑顔になる。

「僕にも、さっきあんなことを言ってしまった弱みがあるよ。……」

一緒に飛ばう」

ドン。

次の銃声が、屋上を囲む柵の一角を裂いた。

2人は、屋上の端の、その裂け目の上へ走り乗った。

そして、上を見上げる。

5つのヘリコプターのうちの1つが、ゆっくりと高度を下げる。

2人は、ぎゅっと手を繋いでいた。

そのヘリコプターが、着地する。

2人は、体は外を向いて、顔だけヘリコプターのほうを向いてい

た。

ヘリコプターから、1人の迷彩服で太った男が出てくる。

押谷だ。

押谷は、どこかと、それでもなお瀬庭に銃を向けながら、泉佐野に尋ねる。

「なぜ、私を裏切りましたか」

泉佐野は、そんな声にはびくともしなかった。

「僕は、瀬庭を説得しました。僕がずっと抱いてあげるから、瀬庭はもう悪いことはしない。そう誓いました」

それを聞いて押谷は、ため息をつく。

「泉佐野、君には2つの罪がある」

「何ですか」

「我々を裏切った罪、そして敵に同情した罪だ」

「僕は軍人ではないので何も分かりません」

泉佐野はそう言い、次に瀬庭の方を見る。

「私、地獄行きかな」

瀬庭がははつと笑う。押谷はすごい剣幕で、瀬庭の背中に向かって銃を構えている。

「私の翼も、こんなにボロボロになっちゃって」

後ろを全く気にせずに瀬庭は、翼の端にそつと触る。羽根がいくつか、舞い落ちる。

「うっん、僕も瀬庭も、もうすでに立派な翼を持っているよ」

「分かってる」

瀬庭はそう言って、泉佐野の背中をぎゅつと抱く。

これまでの抱き方とは違って、やわらかい自分の体を、ぎゅつと押し当てるように・・・。

「今までで一番あつたかいよ、瀬庭」

「ありがとう」

2人のやり取りを聞いて、押谷は一気にこの2人を止めなければいけない感情にかられた。

しかし、やめた。 同情は、しない。 軍人として。
押谷は、瀬庭に銃を構えている。
この校舎は、4階建て . . .

「さあ、飛ぼう」 泉佐野。

「私とあなたの翼で」 瀬庭。

瀬庭は、銃剣に満ちた翼を大きく広げる。
そうして、2人は、前へ足を踏み出す。

飛ぼう。

大空の彼方へ。

桐生先生は、教室の教壇に立って言った。

「このクラスは2人いなくなりましたが、みなさんは2人の分も頑
張って、無事に卒業できることを切に願っています」

クラスのおちこちから、泣き声が漏れる。

「泉佐野」

竜造寺が、思わず声を上げる。

2人の机には、花が飾られている。

白い、白い、真っ白い花が . . .

泉盛寺公園。

若葉の生え始めた桜の木から、最後の花びらが舞った。

宙を舞った。

それは、桜の木を超えて、隣の家の屋根をも越えて、最後の春風
に運ばれて、校舎を高く、高く、高く舞った。

ひらりと一度は校舎の壁に張り付くが、再び舞った。

上へ、上へ、上へ。

ひらりと、学校の屋上へ、その花びらは辿り着いた。

「ん？」

屋上の柵の修理工事をしている一人の工員が、地面に落ちている桜の花びらに気づく。
それを拾い上げる。

「どうした？」

別の工員が尋ねてきたので、答える。

「こんなところに、桜の花びらが……」

白い。

まるで、翼のように・・・。

翼は みんなみんな持っている。

翔こう。

青い青い空の、尽きる時まで。

背羽 完

P r e s e n t e d b y K M Y

#7 勇気（後書き）

つまらなくですいません。ありがちな描写満々ですいません。またエピソードがあります。

#エピソード

青い空から、一つの白い羽根が落ちてくる。

白い手は、その羽根を掴んだ。

そして、青い空にかざした。

「鳥ー人間ー美南ー、鳥ー人間ー美南ー」

美南と呼ばれた一人の少女は、両手で顔を覆っている。その周りを、10人程度の男の子が囲んでいる。みんな、制服。中学生のようである。

美南は、ひつくひつくとしゃっくりをしながら、真っ赤な顔を前の男の子に見せ、大きな声で言う。

「ち、違うもん！」

「だって、見たんだもん、俺、ねえ」

その男の子は、隣の男の子に尋ねる。

「俺も見たよ。美南は背中に翼持っているんだもん、ねえ」

「ああ、俺もだよ。というか美南の父さんは鳥じゃないのお？」

「違う！」

美南はそう叫んで、男の子たちの囲いをすり抜けて、走っていく。

「ははははははは……」

後ろから、男の子たちの笑い声。

美南は、西田中学校の屋上の端に立っていた。

胸ほどの高さのある柵を、掴んでいた。

ここから落ちたら、どうなるんだろう。

美南は、泣いていた。

背は低く、髪もショート。その小柄な体は、空を見上げた。

お母さんからは鳥と罵られ、

お父さんからはこれがあるだけで失望され、

弟からはいつも背中に熱いものや冷たいものをつけられる。同級生たちも、最初は仲良くしてくれるんだけど、いつしか珍しいものを見る目で接してくるようになった。

嫌。それが嫌。全部嫌。

家族なんて、いない。友達なんて、いない。

私のことを思ってくれる人なんて、いない。

美南は、上半身の制服を脱いだ。

上半身裸になった美南の背中から、真っ白の大きな大きな翼が生える。

羽根がひらりと、いくつか舞い落ちる。

そのうちの1枚を拾って、美南はその付け根をぎゅっと掴む。

これさえ、なければ。

その羽根には、ぼたり、ぼたりと、涙が落ちる。その度、羽根が上下に揺れる。

何なの？

翼があるだけで、特別ななの？

何もかも特別ななの？私、人として生きていけないの？たかが翼があるだけで。

翼があるだけで他のところは普通の人と全く同じなのに、それでも私、人として生きていけないの？

美南は、泣いた。

《屋上で20年前、翼を生やした女の子が飛び降りて死んだそうだよ》

いつしか小耳に挟んだ、その声。 あの男の子の声。

《君も早くそうになったらいいね》

美南は、柵を掴んだ。檻に閉じ込められているかのように、ぎゅと強く、柵を掴んだ。

「瀬庭」

どこかで聞いたような声が、後ろからする。

美南は、裸になっている胸を手で押さえながら ゆっくりと後ろを見る。

そこには、一人の男の子が立っている。ぐっと、唇を噛んでいる。学生服。

「瀬庭」

その男の子は、もう一度問いかける。

その男の子の名前は、掛川・・・。

「泉佐野」

あれ？泉佐野なんて、どこから出たの？この男の子の名前は掛川でしょ……？

掛川。そう言おうとしたが、なぜか声が出なかった。

掛川は、いつもいじめのグループには加わらず、教室の隅っこで静かに本を読んでいる。そして、たまりに挨拶を交わすくらい。

でも、何だろう。

この親近感は……。

美南は、はらりと胸を隠している手を下ろす。掛川はにっこりとして、美南にもう一度言う。

「瀬庭。翼、治ったんだね」

「……………」

美南は、その言葉に、その声に、どこか懐かしいものを感じた。待っていたよ。瀬庭」

そう言われ、美南は、瀬庭は、掛川のほうへ駆け寄る。

さっきの涙など、まったく感じさせない笑顔で。

掛川は、泉佐野は、ぎゅっと瀬庭を抱く。

「もう、20年は待たせすぎでしょ」

瀬庭もそう言って、泉佐野をぎゅっと抱く。

「待たせてごめん、瀬庭。顔を上げて」

泉佐野がそう言うと、瀬庭はゆっくりと顔を上げる。

キス。

唇に、なにかやわらかいものが乗った感触が、瀬庭にはした。

あつたかい。やわらかい。体も一緒に、とろけてしまいそう。
ゆっくりと唇を離れた泉佐野は、瀬庭に言う。

「20年も待たせてごめんね。」

「ずっと、抱いてあげるからね。」

「ずっと、そばにいてあげるからね。」

「ずっと、守ってあげるからね。」

「温もりなら、いくらでもあげるよ。」

真つ白な羽根は、風を伝い、大空をひらりと舞う。

そうして、ゆっくりと降りてくる。

真つ青な空の下で、一つの手がその羽根を掴み、そうして青空にかざす。

「羽根だ」

かざした泉佐野は、言った。真つ黒のスーツ姿であった。

「私たちと同じ人かな」

隣の瀬庭も、真つ白のウェディングドレスをしている。

その教会の外には、泉佐野と瀬庭と神父の3人しかいない。辺りはがらりとしていたが、それでも。

「誰にも理解されなくたって、いい。これは、私の翼だから」

「瀬庭はそう言って、そつとその羽根に触る。」

「僕らが本当の名前だった頃に、出て行ったものかもしれないね」

泉佐野はそう言って、瀬庭を見る。瀬庭も、泉佐野を見る。

真つ白の羽根は、春風に運ばれて、今も大空の遥か彼方を舞っている。
いる。

只管^{ひたすら}未来を追って . . .

#エピソード（後書き）

ここまで僕の世界一つまらない小説を我慢して読んでいただきありがとうございます。感想と言つ名の苦言、苦情、その他この小説を読むことによつて損なわれたあなたの人生の貴重な時間の弁償の請求などをお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7126i/>

背羽

2010年10月8日15時54分発行